

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

≪人社系≫

●神戸大学人間発達環境学研究科

「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施したのか)

自領域の専門性を活かすだけでなく、他領域の専門性を理解し、現実生活において実践者と協調し得る「実践的研究者」の育成をめざして、大学院生が、自領域だけではなく、他領域における正課外活動（企業・行政・NPOにおける活動への参加、あるいはそれら各組織と大学との協働的な場面への参加、学外の学術活動への参加、教員の学内活動への補助的参加）を行い得る仕組みを創成した。具体的には、本研究科関連の活動メニューを「正課外活動スケジュール」として掲示するとともに、それへの誘導的事業として「オリエンテーション合宿」「イニシャルプログラム」「活動デザインワークショップ」などを実施した。そして、それらが院生の専門教育と連動して意味あるものになったかを院生自身が判断するために「リフレクティブプログラム」を実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

院生側の主体性・自発性を尊重し誘発するために、各領域の院生の代表をメンバーとする「ヒューマン・コミュニティ創成委員会」を創設した。また、NPOや学外協力団体の理解を得るために、学外協力者ミーティングを頻繁に開催するとともに、教員やスタッフが院生とともに活動に参加するというところを行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

人間発達環境学研究科は、文理融合型の新しい組織であるため、院生の専門的な活動についての院生の間での相互理解が乏しかった。それぞれの領域に関連している実践活動・学術活動などに異なる領域の院生が補助的に参加することによって、自領域の専門性をより明確に理解するようになったり、他領域と自領域の関連性を実感するということが生まれた。また、実践に資する学問の意味を深める契機ともなった。

●広島大学国際協力研究科

「グローバルインターンシップ推進拠点の形成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・インターンシップでの活動を有意義なものとし帰国後の振り返りや発展を促進するため、実施前に、英語プレゼンテーション研修、PBL科目、能力開発特論（ディベート演習、ケースライティング演習）、リスク管理セミナーを、実施後に帰国報告会、課題発見演習（ケースライティング実践）を実施した。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・英語プレゼンテーション研修においては、自己紹介、任国・受入機関事情、インターンシップ活動計画について3回に分けて発表させるとともに、プログラムOG、OBを中心とした先輩学生をTAとして雇用し、内容のチェックに当たさせた。
- ・ケースメソッドの導入や現場の体験の深化に関しては、本手法の実施やGP活動に関して先行している国際基督教大学、東京海洋大学並びに京都大学より講師を招聘しセミナー、シンポジウムを実施した。また、開発コンサルタント会社の実施しているアフリカ農村疑似体験研修を事前演習の題材として用いた。
- ・事前のインターンシップ等で生じた事例を参考に毎回犯罪、事故、疾病に関する内容を再構成した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・学生たちにとっては英語による表現力の高度化に寄与しただけでなく、インターンシップ活動へ向けての事前準備の役割も果たすこととなった。
- ・平成21年度においては、事前研修にて19編、インターンシップに関するものが8編の教材ケースが作成されこのうち24編がケースブックとしてまとめられた。平成22年度については、正規科目で作成されたケースが約30編、インターンシップに関するものが17編作成され、これらのうちインターンシップに関するものを中心に20編程度のものをケースブックとしてまとめる予定である。また、22年度夏期参加者が作成した教材ケースのうち1編を冬期参加者事前研修の教材として用いた。以上の通り、インターンシップ体験の蓄積と共有が機能し始めた。
- ・リスク管理セミナーに関しては、事後評価において学生たちより高い評価を受けた。

●東北学院大学文学研究科アジア文化史専攻

「遺跡遺物資料処理技能開発の日中韓協同推進」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本取組の中核の1つである「史料情報処理技能」、すなわち「遺跡」の物理探査・GPS測量、「遺物」の3D計測・データベース化、民俗・民族「資料」や近現代史上の証言のアーカイブス化のために購入した機器の操作技能や各種情報の処理技能を、演習科目や特別学外実習の場を利用しながら複数分野の院生に共同して習得させ、あるいは理解をさせ、その上で論文作成や就職後の遺跡調査や史料調査等に有効活用させることである。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ①「史料情報処理技能」を円滑にかつ継続的に習得させるためには、TA制度も活用して、

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

本プログラムに参加した後期課程院生に前期課程院生の、前期課程院生には将来の院生候補である学部生の技能指導の補佐をさせた。

- ②1 リサーチ・プロジェクトあたり 2 分野以上の院生を参加させ、「学際性」や「分野横断性」への理解を高めた。③物理探査や 3D 計測等の専門性の高い技能については、専門家を招聘して現地講習を開催した。④「日中韓協同推進」については、客員教授や取組関連国際シンポジウムで招聘した中韓の講師から現地指導・助言を得たり、後述する中韓での「学外実習」において各種の処理技能を積極的に活用するよう促した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ①考古学と民俗学分野の院生のなかには文化財・教育文化分野に就職した者がいたので、今後習得した技能や視点を有効に活用できるであろう。
②単独プレーの多い歴史学分野の大学院生の「学際性」や「分野横断性」、「現地調査」への意識が各段に高まり、史料収集にあたって積極的に「撮影・データベース構築技能」を活用する者が従来と比べて増加した。

●日本福祉大学医療・福祉マネジメント研究科医療・福祉マネジメント専攻
「高度な専門性を備えた福祉現場の人材養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

介護保険制度・医療制度改革などによって医療福祉現場においては、高度な医療・福祉の専門知識だけでなくマネジメント能力を併せ持つ人材が求められるようになった。そのニーズに応えられる高度専門職業人を養成することを目的として、医療福祉サービスと経営の両面におけるマネジメントを学べる新研究科「医療・福祉マネジメント研究科」を開設した。大学院と現場の循環システムをつくるため、①現場で活躍するロールモデルとなりうる人材を実務家教員として受け入れ、②現場の実務家と大学院の専任教員がともに参加して現場における研究課題に取り組む「実務家の参加する研究会」を組織し、③多様な実践事例をもとに教育課題を盛り込んで作成したケース教材を用いて多様な背景を持つ学生が参加し討論をする「ケースメソッド演習」を導入し、④現場で起きている問題状況を題材に実践を講義してもらう「福祉サービスマネジメント特講」の開講などをした。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学院 GP の目指した高度専門職業人養成を前面に押し出すため、既存の修士論文執筆を軸とする研究者養成を目的とする特別研究コースとは別に、現場で活躍する高度専門職業人養成を目的とする実践研究コースを設置した。そこで養成すべき人材が取り組むべき実践的な事例を題材とした学習や研究が可能となるように、上述した「実務家の参加する研究会」「ケースメソッド演習」「福祉サービスマネジメント特講」などを導入し、その研究活動や教材開発、講師役に、実務家教員に関わってもらった。専門科目の講義や 1) サービ

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

ス分野 2)地域分野 3)臨床分野、4)医療福祉経営分野の4クラスの専門演習で専門性を深めると共に、全分野の院生が「共通言語」を身につけるために一緒に履修できる講義科目や討論重視型のケースメソッド演習を配置して InterProfessional Education (IPE：多職種連携教育)も重視した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

新研究科として医療・福祉マネジメント研究科を開設し、初年度の2009年度には定員(30人)を上回る39人の一期生を受け入れた。教育目標について研究科委員会で討論を重ね、7つの教育目標を掲げ、それらの行動目標も例示し、評価表を作成することで、院生が自己評価できるようになった。現場と大学院との循環の実例として、10あまりの「実務家の参加する研究会」が組織され、「福祉サービスマネジメント特講」は、学外者も含め延べ89人が履修・聴講した。ケースメソッド演習やその教材開発にも取り組む研究会には、院生だけでなく、修了生や学外からも参加者を得たり、業界団体などから研修依頼が寄せられるなどの波及効果が見られ、現場と大学院の循環を実現できた。これらを担う実務家教員として35人に委嘱をし、それらの多くは継続してその役割を担ってくれている。

《理工農系》

●電気通信大学電気通信学研究科電子工学専攻

「実践的テクノロジスト育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

危機・限界特別実験という当該プログラムで新たに設置した大学院専門科目においては、専攻を超えた受講が可能になるように、また、他の授業、研究室での研究などにより受講できなくなることを避けるために、実験時間の通常講義の時間外化、受講機会をフレキシブルに対応できるシステムの導入を行った。この特別実験では、実験により少人数で行う必要があるものが多々存在する。そのため、全受講生が1つの実験を行うのではなく、今週の実験は〇〇と△△、未受講生のうちで受講候補者は□□、△□、…とwebでスケジュールを明らかにしたのちに、都合がつかない受講生の入れ替えなどを行えるようにして、少人数かつ多くの受講生の受講を確保することが可能になった。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

受講学生には、実験の性質上、インストラクションを含めどのような実験になるかを十分説明する必要がある。また危機・限界にかかわるために、少人数にならざる得ないものの受講についてもオリエンテーションで十分説明し、実施時にはその都度メールベースでの連絡を当日を含めて行うようにした。このようにすることで、自由な受講機会であるが、欠席の少ない実験受講体制を用意した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

危機・限界体験では10個の特別実験テーマを受講＋特別講義の受講が単位修得の条件になっている。これを修士2年間で行うために、ある程度学生にとっては余裕ある受講体制になったと思う。また、最も少人数の場合4人等になる実験を抱えながら、60名にも及ぶ受講生を4人の教員が対応できたことは、マンツーマンに近い対応が場合によりできるいい教育体制になったと思われる。

●神戸女学院大学人間科学研究科人間科学専攻環境科学分野

「環境と健康のために行動する女性科学者養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

従来のカリキュラムでは大学院生の語学教育は、あまり重視されていなかったため、「サイエンスのための語学研修」を設けた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学院生のライティングとコミュニケーション能力の向上をはかることに主眼をおき、ネイティブの講師を招いて毎週研修を実施した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

アンケート結果では、参加した多くの大学院生が、科学論文を書いたり読んだりする能力、英語によるコミュニケーション能力を高める上で役立ったと考えている。

≪医療系≫

●自治医科大学医学研究科医科学専攻

「新時代の地域医療学を創る人材の包括的養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

学生の英語による発表・討論能力の向上を目的とし、学生が各自の研究テーマについて英語でプレゼンテーションを行い、海外招聘講師及び学内研究者等の質問及びコメントに対して英語で回答する Scientific Exchange Program Seminar を実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

外国人講師を招聘することで、模擬の国際学会等とし、正確な英語による研究発表を行わせた。また、英語によるディスカッションを行うことで、ヒアリング力、理解力の向上を図った。さらに、担当指導教員を同席させることにより、学生がより正確に質問等に回答できるよう、適宜学生に質問の解説及び質問に対する回答の指導等の配慮をした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

Scientific Exchange Program Seminar の実施は、国際学会等での積極的な参加を促して

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

いるとともに、大学院生の英語能力の向上に大きく貢献しており、成果として TOEIC スコアの大幅なスコアアップなどが挙げられる。